THE PRESIDENT COLUMN

卒業生・新入生へのメッセージ

柳澤　保徳
奈良教育大学 学長

春を迎え、卒業・修了と入学の季節がやってきました。学部卒業生の皆さん、おめでとう。皆さんが入学した四年前は、国立大学から国立大学法人に変わった年でした。つまり今年度の卒業生の皆さんは、国立大学法人奈良教育大学の第一期生となります。

戦後、「第一期生」と呼ばれる卒業生は、少なくとも三つの世代にわたります。最初が師範学校から学芸大学となった昭和24年度入学の奈良学芸大学第一期生、次に大学名称が教育大学と改称された昭和41年度入学の奈良教育大学第一期生、そして国立大学法人となった平成16年度入学の皆さんです。昭和40年代の卒業生は、団塊世代の大量退職と称されるように、次第に社会の第一線を退きつつあります。教育界に限らず、若い皆さんへの社会からの期待はいやが上にも高まらざるを得ません。その期待にぜひ応えて欲しいと思います。

法人化後は、「教育の質と内容、方法について、常に学生のことを第一に考えましょう」と教職員の皆さんにお願いしているのですが、年を追うごとにその成果に確かな手応えを感じています。大学教育は、「教員が何を教えたか」ということよりも、「学生が何を学び、どのような力をつけたのか」という『大学での学びと育ち』を重視する方向に変りつつあります。学部での教育改革も、このような流れの中で行われつつあります。

最近、「学士課程教育の質の保証」という言い方がされるようになりました。とりわけ教員免許という資格は、狭い意味の成績と単位取得だけではなく、学生の皆さんの自発的な学習の成果である、「どのような力を身に付けたのか」ということと密接に結びついています。そのことをどのように確かめる（検証する）のか、奈良教育大学ではその仕組みづくりに取り組んでいるところです。

また本学では、平成20年度から新しく教職大学院がスタートします。「専門性と実践力を兼ね備えた教員」の養成に向けて、地元教育委員会や小中学校との連携による理論と実践を融合した教育により、修了時の資質能力を保証できるような教育課程を用意しました。

新入生の皆さんは、卒業後の自分を思い浮かべながら、学士課程四年間の学びを、自分なりに構想されるといいでしょう。例えば、この授業の目標は何か、何を学ぶのかについてしっかりと理解しましょう。実は、目標が定まれば、道は半ばまで進んだと言っても過言ではありません。先日、卒業予定者の学生の皆さんとお話しする機会がありましたが、入学と同時に卒業後の将来イメージを持つことの重要さが、異口同音に語られました。さまざまな経験を経て、在学中に変わることがあっても構いませんが、ぜひ自分の目標を持ってください。

さて、奈良教育大学は、大学としての歴史はほぼ60年ですが、教員の養成という使命を考えれば、明治21年創設の奈良師範学校をその前身としています。今年は、師範学校の開校から数えて120年の節目の年を迎えます。

同窓会や後援会の皆さんのご賛同を得て、今秋には120周年記念行事を計画しています。単なるセレモニーだけではなく、新しい飛躍の契機となるよう、大学全体の取り組みにしていきたいと思います。